

～子供の気づきや意見を計画に反映していく保育の実践～

同行1回目

二人の年長児から土の器づくりが始まったことから、多くの子供たちがその遊びに没頭し始めた。計画していた活動よりも、子供自ら始めた遊びが、他の子供たちを巻き込み広がった。



子供の発見と  
試行錯誤が見られた活動

同行2回目

落ち葉拾いやボール遊びに出かけた。保育者が先導し、おぼけごっこ・サッカーなど、あちらこちら走り回りながら遊ぶ子供たちの姿が多くみられた。保育者を介したゲーム性のある遊びが多かった。



広場で保育者と一緒に  
遊ぶ活動

同行3回目

どんぐり拾いのほか、枝や樹皮等の自然物を使って、焚き火ごっこや焼肉屋さんなどの遊びを作り出す子供たち。それぞれがじっくりと遊びを深め、展開する姿が見られた。



自然物での見立て遊びが  
広がった活動

アドバイザー総括[本事業を通じての考察]

1.本事業への取組方針

自然環境を活用した子供主体の保育の普及促進を目指した。各園ならではの取り組みと一緒に検討し、自然環境だけでなく室内保育等、日々の保育実践にもつながる視点等を学ぶ機会となるよう努めた。

2.アドバイザーの意図

- 保育の伴走者として、参加園の保育者と同じ目線で一緒により良い活動を考えていった。
- ファシリテーターとして、保育者一人一人の気づきを引き出し、個々の視点をまとめていった。また、保育者間の視点・認識の違いに気づく機会となることを意図した。また“反省”よりも“対話”から学び合うことで、次へ活かしていくための振り返りを意識した。
- 「子供主体の保育とは？」を突き詰めるよりも、その日の子供たちの姿から成長発達や興味関心を感じとり、次の活動や普段の保育へつなげることを意図した。
- 散歩中の安全管理や子供のリスクのある遊びの安全管理の視点などを意図的に伝えた。

3.活動中に見られた子供と保育者の変化と効果

- 「子供の遊び方を見て、子供から学んだ」という保育者の姿があった。子供の姿を注意深く観察することで、子供が大人の想定を超えた気づきや発見、成長をしていることを知った。
- スポットの補佐で入る保育者も一人の保育者として子供の姿を捉え、保育と一緒に作っていくことが大切と気づき、積極的に関わるようになった。
- 保育者が良かれと思って手をかけること、守ることで、子供の成長が止められ、かえってリスクが高くなっていることに気づき、子供自身の気づきを促す保育者の姿が見られた。
- 保育者とのごっこや固定遊具での遊びが多かった子供たちが、自然を使って自発的に遊びを作り出し、子供同士でも遊びが広がる姿が見られた。
- 保育者の関わりが変わり、子供たちの姿が落ち着き、子供たちからの発言が増えたようだった。
- 普通なら通り過ぎるようななんでもない場所で、子供たちが遊び込むようになった。

令和6年3月発行  
令和5年度子供主体の保育普及促進事業 概要報告(リーフレット)

※活動の詳細は「令和5年度子供主体の保育普及促進事業活動報告書」をご覧ください。

〈編集・発行〉  
東京都福祉局子供・子育て支援部保育支援課  
電話:03(5320)4130(直通)

令和5年度

子供主体の保育普及促進事業 概要報告

事業目的

東京都では、自然を活用した保育の中で、子供の主体性や想像力、思考力など「生きる力」を育むことを目指し、令和元年度～2年度に「自然を活用した東京都版保育モデル事業(以下「モデル事業」という。))に取り組むとともに、令和4年度にはモデル事業の成果を活かし、「子供主体の保育普及促進事業」として、都内保育所等へのアドバイザー派遣、保育所等職員向けのセミナー・交流会、都民向けの報告会やシンポジウムを開催した。令和5年度は、これまでの取組を踏まえ、都内保育所等へのアドバイザー派遣を引き続き実施し、子供主体の保育への理解促進と保育の現場における実践により、保育の質の向上につなげることを目的に事業を実施した。

事業内容

■アドバイザー派遣事業

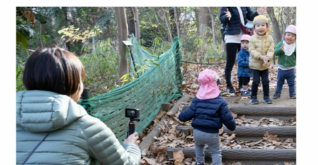
子供主体の保育の実践に支援を希望する保育所等に、モデル事業の考え方や子供主体の保育に関する専門知識、ノウハウ及び経験を有するアドバイザー(以下「アドバイザー」という。)を派遣する。

アドバイザー

一般社団法人 new education Little Tree



実施内容



導入研修(目線合わせ)

活動同行を実施するクラスの保育者等を対象に、アドバイザーによる研修を実施。事業の目的や進め方を説明し、自然を活用する子供主体の保育の考え方や子供との関わり方のヒントを伝えた。

事前視察(現状把握)

活動同行に先立ち、参加園の保育の現状を把握するため、アドバイザーが園を訪問し保育の様子を視察した。また、園の課題や事業に期待することについて、園長や保育者から聞き取りを行い、園の状況にあわせて担当するアドバイザーを決定した。

活動同行(3回)

近隣の公園での活動や散歩にアドバイザーが同行し、活動終了後は、アドバイザーと保育者で振り返りを実施した。同行中の子供たちの様子や保育者の子供との関わりについて、気づいたことや良かった点を共有し、今後の保育を良くするためのヒントなどについて考えた。各園計3回実施した。

参加園での取組の様子

～小規模保育における子供とのほどよい距離感の模索～

同行1回目

事前視察時のアドバイスをもとに、見守り保育を実践したところ、かえって子供たちと距離が離れ過ぎてしまった。子供たち一人一人は遊んではいるが、保育者の関わりが薄くなってしまっていた活動だった。また一人走り回る子供の対応についても検討した。



見通しの良い  
広場での活動

同行2回目

目的地へ向かう途中、子供の様子を見て、予定を柔軟に変更しながら行うことができた活動だった。子供たちとの距離感もよくなり、大人自身も自然を楽しむ姿が出てきた。枝を持って遊ぶ体験をさせるための安全管理について検討した。



木々や落ち葉に触れながら  
遊んだ活動

同行3回目

落ち葉や小さな虫など冬の自然を感じる遊びが体験できた活動だった。子供の声を聴き、遊びに気づく関わりができていたが、寄り添い過ぎてしまった。子供たちにどこまで寄り添うか、切り替えのポイント等について話し合った。



子供も保育者も冬の自然に  
気づいた活動